

目 次

新図書館戦争：研究者・図書館のささやかな抵抗	1
寄贈図書一覧（平成28年7月～12月）.....	5

教養図書コーナーのご案内	6
情報の探し方 博士論文の探し方	7
お知らせ	8

新図書館戦争：研究者・図書館のささやかな抵抗

森 田 啓 之



かつては図書館によく通ったが、最近はほとんど行く機会がない。その原因は、PubMedと電子ジャーナルの普及である。私が所属する医学系研究科の基礎分野では、教育に加え研究が大きな比重を占める。研究成果を発表するために、論文を作成するのであるが、その過程で重要なのが文献検索である。

Index Medicus

私が最初に職を得たのは、1981年香川医科大学（現在の香川大学医学部）であった。当時の文献検索は、図書館にこもり、Index Medicusという分厚い本を何冊も机に広げて行うものであった。月刊版と年刊版があって、最新年の検索には月刊版、それ以前の検索には年刊版を用いた。MeSH（Medical Subject Headings）というキーワードあるいは著者名を用いて検索し、該当する論文タイトル、掲載雑誌、年、巻、ページを書き写すという作業をひたすら繰り返した。そのメモ書きを持ち、書架へ行き、やっとお目当ての論文と出会える。所蔵リストにない場合は、サービスカウンターでコピー請求の手続きをし、1週間待ちである。お目当ての論文に出会えれば嬉しいが、見当はずれの論文であれば、苦労した分落胆も大きい。

Index Medicusの歴史は古く、1879年にまでさか

のぼる。米国陸軍軍医総監局の一部門として設立された軍医総監局図書館（米国国立医学図書館United States National Library of Medicineの前身にあたる）の館長として図書の管理を担当していたJohn Shaw Billingsは、1974年に50,000点を超える図書館蔵書の索引集Index-Catalogue of the Library of the Surgeon-Generalを作成した。さらにその5年後、Index Medicusという月刊の医学文献索引集の発刊を開始した。何回かの中断期間はあったものの、米国国立医学図書館に引き継がれて2004年12月まで継続した。文献をMeSHにより整理・管理して検索できるようにするという開始当初のBillingsの思想は、それ以降のMEDLINE、PubMedへと引き継がれている。

オンライン検索へ

米国国立医学図書館は、1971年オンライン検索システムMEDLINEの運用を開始した。しかし、高すぎる通信費、接続のための特殊な末端と検索のための専門知識の必要性がネックとなり、一般のエンドユーザーにまでは行きわたらなかった。私がオンライン検索を最初に使ったのは、確か1990年代半ばだったと思う。1986年にMEDLINEシステムにGrateful Medが導入されて、有料サービスながら、

使い勝手が随分よくなったようだ。しかし、本格的なオンライン検索の始まりは、1997年のPubMedサービス開始を待たねばならない。

1990年代に入ると、インターネット環境が急速に普及し、1996年MEDLINEにInternet Grateful Medが導入され、インターネットでの検索が可能になった。そして、1996年1月MEDLINEを無料で検索できるPubMedの試験運用開始、1997年6月26日の正式運用開始を経て、現在に至っている。All [Filter]で検索すると、2017年3月5日現在の収録論文総数は26,972,366件に達する。最近は、Google Scholarも捨て難く、引用数の多い順に並べてくれる機能、引用元をクリックすると、その論文を引用している論文の一覧が表示される機能などは、出色である。

電子ジャーナル

PubMedの登場とほぼ時を同じくして、電子ジャーナル化の波がやってきた。この間の経緯については、逐次刊行物研究分科会報告第59号（2004～2005年度）に詳述されている。日本で本格的に電子ジャーナルの導入が始まったのは2000～2002年である。2002年には、国立大学図書館協議会とElsevier、Springer、Wiley、Blackwellの4社との間にコンソーシアム契約が成立し、文部科学省から契約に対する予算措置が行われた。それまでは、PubMedで検索した論文を図書館でコピーしていたが、電子ジャーナルの普及により、私の足は完全に図書館から遠のいてしまった。

出版社の戦略？

シリアルズ・クライシスSerials Crisis（逐次刊行物の危機）という言葉がある。図書館、出版関係者以外は耳慣れない言葉であるが、私達研究者にとっても重大な問題をはらんだ言葉である。学術振興に伴う論文数の増加⇒1タイトル当たりのページ数増加⇒学術雑誌価格の高騰⇒購読者による購読キャンセル⇒ますますの価格高騰、という悪循環を言う。欧米では1980年代、日本では1990年代にシリアルズ・クライシスが訪れた。こうした状況の中、電子ジャーナルが出現するのである。査読・校正等の編集費用は冊子体と変わらないが、印刷費・維持経費等は削減できるはずである。にもかかわらず、電子ジャーナル移行後もシリアルズ・クライシスは続くのである。

2016年度に岐阜大学が電子ジャーナル購入に支出した金額は、108,543,824円であり、2007年度の

66,635,236円の60%増となっている。このうち最も大きな比率を占めているのはElsevier社が提供するScience Directであり、2016年度での支出は64,452,606円である。タイトル数は2013年度からほぼ一定であるのに、購入費は毎年ほぼ一定の割合で増加している（図1）。

多かれ少なかれこれと同じ傾向が他の電子ジャーナルでも見られる。また、商業出版社は吸収合併を繰り返しており、少数の出版社が大半の学術雑誌を発刊するという寡占化がこれに拍車をかけている。岐阜大学における電子ジャーナルと冊子体の合計予算は、約1.3億円であり、出版各社の値上げに対応するためには、購入パッケージ数を減らすか、パッケージ内のタイトル数を減らすしかない。すなわち、シリアルズ・クライシスである。

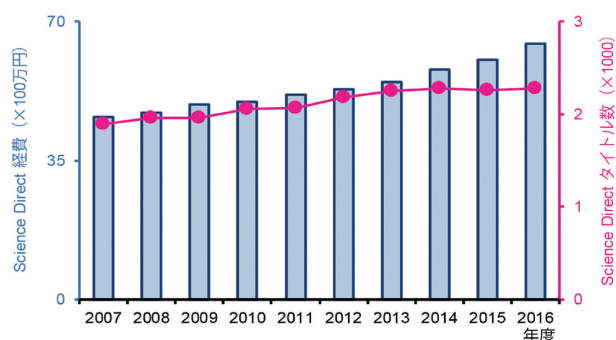


図1 岐阜大学におけるScience Directの購入経費とタイトル数の推移

そして研究者・図書館の反乱？

学術雑誌の質を担保するための重要な部分を占めるのが査読（peer review）システムであり、この過程は研究者のボランティア活動によるものである。研究者自らがeditorとなり、査読者を選定する。査読者も研究者である。私は2016年1～12月で、editorとして55本、査読者として21本の論文を担当した。論文を査読し、コメントを書くためには、投稿された論文だけを読めばよいというものではない。参考文献その他の関連論文を読む必要がある。また、ドンピシャ自分の得意分野の論文のみが割り当てられるわけではないので、結構時間を取られる。これも勉強と言ってしまえば、なるほどその通りではあるが、それが出版社の飯のタネになり、しかも無慈悲にも毎年値上げしてくるから如何ともし難い。

インセンティブは、Wiley-Blackwell社（Wiley

websiteから書籍購入する場合、20%値引き）以外、ほばない^{注)}。せめて、査読の度にポイントを加算し、所属教員のポイント合計に応じて電子ジャーナル購入費を値引きするとかすれば、まだ気分も違う。この様な無慈悲な商業出版モデルに対して、研究者・図書館は対抗措置を考えていくこととなる。すなわち、オープンアクセス運動である。これは、電子ジャーナル論文を無料で公開し、誰でも自由に制限なくアクセスすることができるようにするというもので、商業出版モデルを根底から揺るがすものである。

注) 若い時によく言われたのが、「査読者を依頼されたら、断ってはいけぬ。Editorをしている先生は、その領域のトップであり、金を握っている可能性が高い。よいreviewを書けば、目をかけてくれる。そのうちよいことが起こるかも？」なんと、計算高いことか。しかし、当たらずといえども遠からず。若い先生方、査読を依頼された時は決して断らず、頑張ってよいreviewを書きましょう。

オープンアクセス運動

オープンアクセス運動の理念の1つは、「研究成果を研究者自身の手に取り戻す」であり、2つの戦略がある。オープンアクセス誌の発刊とセルフアーカイブである。オープンアクセス誌は、出版費用を購読料で賄うのではなく、投稿者からの投稿料・掲載料、寄附、会費により賄い、オンライン公開する雑誌である。2000年のCurrent Science GroupのBioMed Central、2003年のPublic Library of Science (PLOS)のPLOS Biologyが先鞭をつけ、これらをビジネスモデルとして現在多くの雑誌が発刊されている。また、著者の選択により論文単位で別途費用を徴収し、オンライン公開しているオープンアクセス・オプションを持つ雑誌もある。

セルフアーカイブの方法として現在の主流は、研究機関リポジトリと研究助成機関リポジトリである。後者には、主に税金が原資である助成金によって行われた研究成果を納税者に還元するという意味合いもある。これらのリポジトリを実行するためには、著作権を保有している出版社の許諾が必要であるが、案外多くの出版社はリポジトリを認めている。

時実象一は、2005年に「オープンアクセス運動の今後」として、以下の4つのシナリオを想定した。①大学の機関リポジトリが発展し、電子ジャーナルの購読に影響が出る、②オープンアクセス雑誌が広

がる、③リポジトリと査読システムを結合した新しい出版モデルが登場し、研究者の支持を得る、④リポジトリも十分発展せず、オープンアクセス誌も広がらない。さて、11年後の現状はどうか？一番近いのは②か？

2000年以降、オープンアクセス誌は毎年18%、論文数は30%の勢いで増加し続け、2009年には4,769誌191,000論文、査読システムを採用する論文の7.7%を占めるまでになっている (Laakso et al., 2009)。この勢いはその後も衰えることを知らず、2017年3月現在、128か国で9,389 (検索可能なものは6,757) 誌が発刊され、論文数は2,437,067に上る (DOAJ)。まさに玉石混交状態。コロラド大学図書館のJeffrey Beallは「Potential, possible, or probable predatory scholarly open-access publishers」として怪しげな1,156の出版社をあげ、これらのオープンアクセス誌には関わらない方がよいと警告している (Beall's List)。実際少なからずのオープンアクセス誌では、「peer review」とは名ばかりで、金で論文を採択するようなことが、平然と行われている。投稿料・掲載料で運営するというスタイルであれば、採択数を増やせば経営が楽になる。しかし、そういう雑誌は淘汰されるということを、投稿者も出版社も自覚するべきである。

終わりに

出版社の戦略に対し、研究者と図書館は立ち上がった。その武器はオープンアクセス運動であり、オープンアクセス誌とセルフアーカイブが2本の矢である。業績の評価がインパクトファクターによって行われ、その評価が研究費獲得に結び付くという現状で、既存の有名誌の牙城を崩すのはなかなか難しいところである。そんななか、オープンアクセス誌は問題を抱えながらもその数を伸ばし、「脅威を与えられるかな？」というところまで行きつつあり、大手出版社でもオープンアクセス誌の発刊を始めるところがでてきた。しかし、セルフアーカイブの方は、まだまだ矢が届いてない。私の領域で論文検索して、セルフアーカイブに行き着くことは極稀である。しかし、これは研究者自身の自覚により改善できる可能性がある。図書館からリポジトリへの登録要請が来ても面倒くさがらず、積極的に参加すべきと考える。そうすることにより、その雑誌を購入していない誰かが、世界の何処かで、あなたの論文を読んでくれる。無慈悲な儲け主義に対する研究者・図書館のささやかな抵抗ではあるが…。

ちなみに、この原稿を執筆するにあたり、久しぶりに図書館を3回訪問し、資料について教えていただきました。

参考

Index Medicus: Wikipedia, https://en.wikipedia.org/wiki/Index_Medicus

MEDLINE: Wikipedia, <https://ja.wikipedia.org/wiki/MEDLINE>

逐次刊行物研究分科会報告第59号(2004～2005年度)
時実象一. オープンアクセス運動の歴史と電子論文
リポジトリ, 情報の科学と技術, 55巻10号, 421-
427, 2005.

Mikael Laakso, Patrik Welling, Helena Bukvova, Linus Nyman, Bo-Christer Björk l, Turid Hedlund. The Development of Open Access Journal Publishing from 1993 to 2009. PLoS ONE 6 (6): e20961. doi:10.1371/journal.pone.0020961, 2011.

Directory of Open Access Journals (DOAJ) : <https://doaj.org/>

Jeffrey Beall. Beall's List: <https://scholarlyoa.com/publishers/>

(もりた ひろのぶ: 医学図書館長、大学院医学系
研究科 教授)

寄贈図書一覧（平成28年7月～12月）

平成28年7月～12月に図書館にご寄贈いただいた図書の中で、本学教職員が著作・編集・刊行等に関係した図書を掲載します。ご寄贈いただき、ありがとうございました。引き続き、ご寄贈をお願いいたします。

●山田敏弘（教育学部）

- ・治水の風土瑞穂市：ふるさと研究30年のあゆみ
／野田清影著

【本館岐阜県郷土史料コーナー 岐250 || Nod】

●早川享志（応用生物科学部）

- ・おいしく食べて体にいい快腸でんぷん（レジスタントスターチ）健康法／早川享志著

【本館3階 498.3 || Hay】

【医図3階 498.3 || Hay】

～内容紹介～

デンプンを含む食品を冷やすと良いのは何故か？最近の健康ブームの中で取り上げられることの多いレジスタントスターチとは何か？どのような効果が期待できるのか？について一般向けにわかりやすく記述した本です。

●塚田敬義（大学院医学系研究科）

- ・バイオバンクの展開：人間の尊厳と医科学研究
= Challenges evoked by biobanks in Japan :
through medical research on human dignity /
奥田純一郎、深尾立共編

【本館3階 490.15 || Bai】

【医図3階 490.15 || Bai】

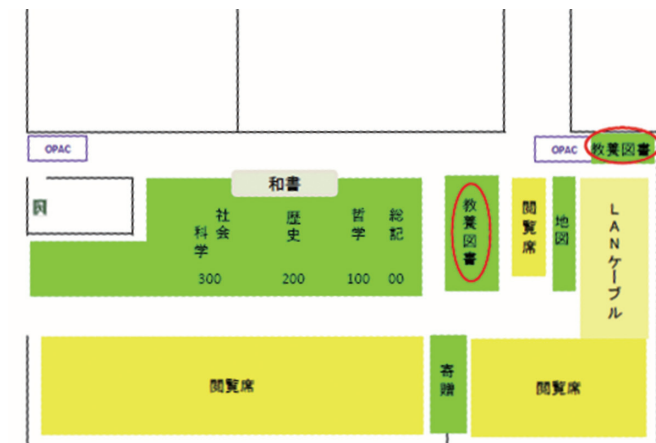
～内容紹介～

ゲノム新時代に入り、個に応じたテーラーメイド医療の時代突入している。その基盤となるバイオバンクの可能性について、医科学研究者、医師、法律家等23名が法的・倫理的・社会的観点から検討した。

※内容紹介文は寄贈者による。

教養図書コーナーのご案内

2016年10月、図書館本館に教養図書コーナーを新設しました。



本館3階南東の閲覧席付近に2箇所、教養図書が並べられた書架があり、2017年1月現在で1,000冊以上の図書が配架されています。

教養図書コーナーは本学教員が学生の皆さんに薦める、様々なジャンルの図書が揃っています。

大学図書館には専門書などが多く配架されていますが、そのような本と比べて易しい本が多く、新入生など初めて大学図書館を利用する人が最初に手に取る本としてもおすすめです。



なお、教養図書コーナーに配架されている図書は、他の場所に配架されている図書とは異なり、独自の請求記号（図書の背ラベルに書かれた数字やアルファベット）が割り当てられています。

図書を探す場合にはご注意ください。

今後も新しい図書が順次追加されていく予定となっていますので、教養図書コーナーを是非ご利用ください。

情報の探し方 博士論文の探し方

博士論文は学位を授与した大学や国立国会図書館に納められていますが、論文の取り寄せを依頼するためには、論文タイトルや著者名など、論文の詳細情報を調べる必要があります。

今回は、博士論文の詳細情報を調べる方法を一部ご紹介します。

1. 学位授与機関のホームページを確認する

学位を授与した機関が分かっている場合は、その機関のホームページを確認すると、要旨などが公開されている場合があります。

また、平成25年4月1日に施行された学位規則の一部を改正する省令により、平成25年4月以降の博士論文は、一部例外を除き、全文がインターネットで公表されることになり、各機関が運営する機関リポジトリなどで本文が確認できることもあります。

2. CiNii Dissertationsを使う

国立情報学研究所が提供しているCiNii Dissertations (<http://ci.nii.ac.jp/d/>) は国内の博士論文を一元的に検索できるシステムです。

論文タイトルや著者名など、様々な項目で検索することができるため、論文について一部の情報のみ判明している場合にはCiNii Dissertationsが便利です。

3. 国立国会図書館の蔵書検索を行う

国立国会図書館サーチ (<http://iss.ndl.go.jp/>) やNDL-OPAC (<https://ndlopac.ndl.go.jp/>) を利用すると、国立国会図書館で所蔵している博士論文について検索することができます。

国立国会図書館には博士論文以外にも多くの図書や雑誌が納められているので、検索する際には検索対象として博士論文を指定することをお勧めします。

博士論文は、学位規則改正以降にインターネット上で公開されているものや、著作権者が全文複写を認めている場合を除き、複写が可能なのは全体の半分までとなっています。

全文複写を希望する場合には、利用希望者が自ら著作権者に全文複写の許諾を得る必要がありますのでご注意ください。

/// お 知 ら せ ///

理念・目標の策定について

岐阜大学図書館では、これまで、図書館の基本姿勢を示すものとして「岐阜大学図書館ポリシー2012」を定めていました。

しかしながら、国立大学法人が第3期目に入り2025年に向けての「岐阜大学の将来ビジョン」が示されるとともに、第63回国立大学図書館協会総会で「国立大学図書館機能の強化と革新に向けて～国立大学図書館協会ビジョン2020～」が採択されたことを受け、新たに「岐阜大学図書館の理念・目標」を策定いたしました。

理念・目標は図書館Webサイトにて掲載しておりますので、詳細はWebサイトをご覧ください。

Full Text Finderの導入について

岐阜大学図書館では、リンクリゾルバ「Full Text Finder」を導入しました。

リンクリゾルバとは、各データベースの検索結果に出てきた論文情報と、その論文の入手方法をつなぐことにより、スムーズな文献入手をサポートするシステムです。

操作方法等は図書館Webサイトにてご案内しております。

図書館Webサイトのリニューアルについて

このたび、岐阜大学図書館Webサイトをリニューアルしました。

これまでのデザインを一新し、スマートフォンからの閲覧を想定したレイアウトへ変更するなど、ユーザビリティの向上に努めました。

今後とも、より分かりやすい情報の提供をまいりますので、よろしくお願いいたします。